
アヤカシとかアレとかソレ

金武 墨喜恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アヤカシとかアレとかソレ

【Nコード】

N7239U

【作者名】

金武 墨喜恵

【あらすじ】

諸注意でございます

- ・ 本作は怪談、都市伝説をベースにした二次創作です。
- ・ 作者の文章力は悲惨です。
- ・ 一部に残酷な描写を含みます（予定）。
- ・ 飲酒、喫煙描写があります。

海と山に囲まれた「陸の孤島」と言われる塔瀬市を舞台に長身黒髪
の相場樹あいはいつきと小柄長髪の月島満つきしまみつるの凸凹コンビが妖怪、幽霊、都市伝説
と関わる、そんな物語。

いつかいめ ヨロツヤ? (前書き)

諸注意でございます

- ・ 本作品は怪談、都市伝説を下敷きに作者が改悪した厨二的二次創作です。
- ・ また、今回はありませんが、以降の作品は一部に残酷な描写を含む場合があるかもしれません。
- ・ 大変申し訳ありませんが、作者の文章力は悲惨です。
- ・ 作者の酒の趣味が大いに反映されています。

いつかいめ ヨロツヤ？

―塔瀬市―

四方を海と山に囲まれ、円形に広がる平地はS字に曲がる川で二分割された「陸の孤島」と呼ばれる都市だ。

かつては造船で賑わった街も時代とともに寂びれ、工場のあった海側の一带はゴーストタウンと化しているような何もない街で幽霊だとか心霊現象といったうさんくさいものを専門とした便利屋がいる。
長身短髪の男―相羽樹あいばいつき―と小柄な長髪の男―月島満つきしまみつる―が経営するその便利屋は『ヨロツヤ』と呼ばれている。

この物語はそんな便利屋『ヨロツヤ』と怪異との物語である。

塔瀬市の繁華街、その片隅に小さなバーがある。薄暗い店内には絶えずジャズが流れ、良質なカクテルを提供するおしゃれな店のカウンターに樹と満は座っていた。

「そうそう、樹よ…そういえばなのだが」

赤いカクテルの入ったグラスを傾け、煙草を灰皿に押しつけつつ満が切り出す。

「なんです？所長」

その横でオレンジのカクテルのロンググラスが入ったグラスを置く
と、樹が首をかしげる。

「先日依頼が入ってなあ、どうやら所有している古民家に何ぞかが出るそうだよ…それと所長と呼ぶのはやめてくれ」

推定40度近くあるカクテルを一気に飲み干すと満は楽しそうに話
しだす。

外見のイメージとはまるで逆だが、度数のきつい酒を平気で飲むのは満の方で、男らしい容姿の樹はどちらかといえば下戸に分類される。「人は見かけによらない」という言葉はこんなところにも転がっているものだ。

「依頼者は不動産をいくつも持っているらしいが…その中に趣のある古民家がいくつかあるそうだ」

満のまとまりのない話を要約するところだ。

依頼者の所有する古民家の内の一つがどんな人に貸してもすぐに出て行ってしまうという。しかし別に周囲の住人との争いがあったわけではないし、立地が悪い訳でもないのに数日もすると入居者が現れ、解約してしまう。

困り果てた依頼者がヨロヅヤに泣きついてきた、とのことだ。

「それで、そこにいるかもしれない何かを駆除しろ、ということですか？」

樹は質問をすると僅かに残ったカクテルを飲み干す。

「いいや、調べるだけでいいそうだ…まあ俺としては駆除は面倒だしそれで構わないがね」

満は肩をすくめながら、人差し指で円を描く―人差し指で円を描くは満が考え事をする癖だ―

「質^{タチ}の悪いものが棲みついていたらどうするつもりなんでしょうね、その依頼者」

「何、そう悪いモノはいないさ、いたらとくに誰かが死んでるからね…マスター、メーカーズのロックをお願いしますね」

少々不謹慎な発言をしつつ満が次の酒を注文する。

相変わらず酒が水のように減る、と思いながらも樹は依頼の内容を整理する。重要なことはそんな依頼を満がつけるかどうかだ。

「それで、受けるんですか？」

樹としては自分達が助けられるものは全て助けたいが、受諾するか否かを考えるべき立場の満は「害がなければ放っておけばいい」という、いいかげんな思想であるが故にまずはそこを確認する。

「受けるもなにも、断ったのに前金とか言っただけでこんな額を置いていきおったんでな、受ける他あるまい」

樹がジャケットのポケットから札束を取り出すと、軽く振ってみせる。

誤解が無いように言っておくと、樹も金を受け取ったからやるのではなく、単純に面白そうだからやるだけだ。「面白そうか否か」それが満の行動理念だ。

以前にはかなりの高額報酬を約束されているにも関わらず「つまらない」の一言でバッサリ断ったことがあるほどだ。

「そうですか、では、行きましょうか」

「ああ、行くとしよう」

2人は依頼を受けることにした。

――翌日――

10月の肌寒い空気の中、深夜2時過ぎに依頼者に聞いた古民家まで歩いている途中、満が不意につぶやく。

「善い夜だな、朧月を見ると酒が飲みたくなる」

「いつでも飲んでばかりの所長が言っても説得力が微塵もありま

せんね」

依頼者からの話によればあと少し、と思いつながら樹が一蹴する。
住宅街から離れ、少し山に近くなってきた。点在する民家とそれを
囲む更地の中2人は歩く。

「やかましい、月とか花とかがあれば酒はより旨くなるだ…あと所
長はやめてくれ」

何度目になるかわからない訂正をしつつ満は右手に提げた水筒をあ
おる。中身はウイスキーかだろう。

「あ、見えましたよ、あの家ですね」

そんな満を完全無視した樹が目的地を見つけ。家というより屋敷
という言葉の似合うその建物は土塀に囲まれ、瓦屋根と土壁の家が
山と朧月をバックにそびえる。そこだけ切り出せば時代劇にでも使
えそうな家は非常に美しい。

「樹、一応用心するといひぜ」

定期的に補修しているのか劣化の見えない土塀に近付くと、突然満
がつぶやく。にやけた表情が女性じみた顔に浮かんでいる。
突然の発言に樹が首をかしげたその瞬間だった。

「うわん！」

突然頭上からそんな大音量の声が降ってきた。

「…今のは？」

あらかじめ言われていたせいか、さほど驚いた様子も見えない樹が尋ねる。

「アレはその声のとおり『うわん』という奴だ…ただ塀越しに叫ぶだけの妖怪だよ、何がしたいかさっぱりわからんが害は無い…もつとも、俺も実物を聴いたのは初めてだがね」

「僕はよく思うんですが、日本の妖怪は害も益もないやつが多いですよね」

素朴な感想を口にしつつ、2人は門を解錠して敷地内に入る。

電気は通してあるらしく、スイッチを入れると屋敷内に電気が灯る。話によると人が住まなくなつて半年だが、その間も手入れはしていたらしく、非常に清掃が行き届いている。

「所長の部屋とはえらい違いですね」

事務所の一角にある満の部屋を思い出しつつ樹が皮肉ると、満は肩をすくめた。

「とりあえず『うわん』は確認、人も住んでないから座敷童はいないだろうし…」

満の独り言をBGMにしながら探索を続けると、庭に面した障子に影が写りこんだ。シルエツトからすると女性だろうか。

「人ではなさそうですね」

気配の無さに気付いたのか樹がつぶやくと、満が解説する。

「ああ、アレは『影女』だろう、害はないはずだ…」

つまらなそうな顔の満はまた水筒をあおる。やる気の感じられない解説ともいえないような発言が冷え切った屋敷の空気に消えていく。

小一時間探索したが、結局『うわん』と『影女』以外は確認できな

かった。

樹は害のあるモノがいれば駆除する気構えだったし、満は面白いモノがいればと期待していただけに2人とも気を抜いていた。

突然満の顔から数センチのところに何かが落ちてきた。

「天井下がりが、これまた害のない妖怪だな…このご時世レアではあるがね」

至近距離に逆さ吊りの老婆の顔があるにも関わらず満は平然としている。

「何です？『これ』は」

奇襲に驚いたのか少し上ずった声の樹が尋ねると、『天井下がり』の顔を指でつつきながら満が解説を入れる。

「こいつは天井下がり、見てのとおり天井からぶら下がって脅かすだけの妖怪だ…ほら、こつちが驚かないのがわかったら消えたる？」満の言葉通り『天井下がり』はいつの間にか消えていた。

さらに半時間かけて屋敷内を探索したが、それ以外は何もなく、2人は帰ることにした。

何せ害をなすモノが存在せず、驚かすのが専門の妖怪ばかりで2人ともすっかりやる気をなくしているのだ。

のんびりと歩きながら2人は事務所兼事務所兼住居に戻った。

—さらに翌日—

事務所の応接スペースにあるソファーに依頼者の中年男性とヨロツヤの2人が向かい合っている。

「あ、あの…害が無いとは…？」

依頼者の男性が不安そうな顔をしているので、樹が屋敷内の探索の顛末を聴かせる。

ことこういった接客、経理などの仕事は樹がほぼ全てを行っている。何せ目つきの悪い満では相手に警戒感を与えていい、さらに満はいかげんな性格なので、ミスばかりなのだ。

「な、なるほど…」

依頼者は納得していないようだ。いくら害が無いとはいえ入居者がすぐに出て行ってしまう物件では所有する意味が無いどころか維持費ばかりがかかってしまう。

「では、その物件僕らがお借りできませんか？」

樹の突然の提案は依頼者はおろか満をも驚愕させた。依頼者からすれば『曰くつきの物件』であり、満からすれば『経理に厳しい樹らしからぬ無駄遣い』なのだ。

「さつき所長がネットで調べてたのを見ましたが、あの物件は幽霊が出る物件として有名になってますし、このままでは誰も借りませんから…僕らがお借りさせていただこうかと思うんです」

菩薩か何かのような笑顔とともに樹はそう言う。

「もっ…もちろんですよ、お安くさせていただきますのでっ…！」

依頼者は非常に喜んだようで、本来の家賃の半分以上で借りる契約で決まることとなった。

―その夜―

2人のたまり場と化しているバーにて。

「俺からは何も言わんがねえ、お前さんそれでよかったのか？」

いかにも呆れた、という表情をした満が尋ねると、樹は少し困ったような表情をする。

「正直、完全に無駄だと思いますけど…あの物件はあのままではいけませんし、あの妖怪達も害がある訳ではありませんから危害を加えたくなかったんです…僕の勝手で負担を大きくしてスイマセン」
平和主義の樹らしい発言に満は満足したような表情を浮かべるとつぶやく。

「お前さんがそうしたいならそれでいいさ。今までのこついつ時のお前さんの判断はいい結果に転びやすかったし」

満はそう言っただけでカクテルグラスの中身を一気に飲み干す。

「それに、たとえばマイナスになってもそれはそれでいいと思えるのさ」

「何ですか？」

「さあね」

満は樹の質問をはぐらかすとまた酒をあおりはじめる。今夜も深酒になりそうだ。

いつかいめ ヨロツヤ？（後書き）

皆様こんにちは、今回初の投稿と相成ります金武墨喜恵と申します
こういった活動はこれが初めてとなります。どうか生温かい目でご
覧になってください。

本作のイメージは「寺生まれのＴさん」とか夢枕獏先生の「陰陽師」
シリーズの感じです。

それらの劣化版にすらなっていないのは私の文章力の問題です。

これからもより一層の技術向上を目指していこうと思います…

それでは、ご覧になっていたいただいた皆様、誠にありがとうございました、
金武でした。

にかいめ こくる？（前書き）

注意

- ・バッドエンド気味です
- ・相変わらず酷い文章です

にかいめ　こくる？

ごっすんごっすん

―塔瀬市内・バー『ネペンテス』―

10月も末になり、外には雪がちらつく、そんな夜だった。その日も樹と満はカウンターに座っていた。

「そっといえは樹よ、『般若』というものを知っているか？」

唐突に満がそんなことを言い出す。

「所長、いくら僕が妖怪に疎くてもそれくらいは知ってますよ」

樹がすこしムツとしたように答える。樹の専門はいわゆる『都市伝説』と呼ばれる類いのものだが、逆に古来からいる妖怪に少々疎い。

「ならば話は早い、つい先日それになりそうな者を見かけたよ」

「それ、本当ですか？」

このご時世に丑の刻参りをする女性がいるとは信じられない、おそらく誰でもそう思うだろう。

「街ですれ違っただけの女性だが…あの全身から漂う呪いの念は間違いないさ」

流石に現場を見たわけではないし、そもそも現場を見て気分のいいものではないしな、と付け加えると、満は自分のグラスの中身を一気に飲み干す。

2人でそんなことを話していると、客が入ってきた。

入ってきたのは如何にも「遊んでます」といった見かけの若い男だ。そういう人間が嫌いな満は横目でそれを見てあからさまに不快そうな顔をする。

男は樹の隣に座ると、男は親しげに話しかけてきた。

「ねえねえオニーサンたち、ここに『よろずや』って人たちが来てるの知らない？」

馴れ馴れしい態度に腹を立てたのか満の額に血管が浮かんだが、それを無視して男はまくしたてる。

「俺さあ、その人探してんだよね、何つーの？依頼ってやつ？」

「僕らがそうですが、どんな御用ですか？」

樹が事務的に対応すると、男はまた長々と話し始めた。

要約するとこうだ。

男―ソウヤと名乗った―は最近夜中になると体に激痛が走る。病院で検査を受けてみたが、何の異常も見つからなかったので、今度は占い師に聞いてみると「呪いをうけている」といった旨のことを告げられ、『ヨロヅヤという便利屋がネペンテスというバーにいる』という噂を頼りにここまで来たそうだ。

「カネならあるしさ、何とかしてくれね？」

本人としては相当参っているようだが、緊張感と礼儀のない口調からはそれが感じられない。

「お断り…「わかりました、何とかしましょう」

即断りそうだった満の言葉を遮り、樹が二つ返事で承諾してしまう。満から凄まじい視線を感じるが、無視だ。

「お、マジ？んじゃたのむわ！」

ソウヤは自分の電話番号を書いた紙を置くと、早々に店から出て行く。この間何も注文しなかったせいか、無言でカウンターの向こう側に立つマスターの顔に「二度と来るな」と書いてあるように見える。

「おいイ、どういっつもりだ？」

非常に機嫌の悪そうな満が樹を睨み付ける。

「僕は自分が助けられる人はみんな助けたいんで」

何食わぬ顔で樹がそう答えると、満は小さく舌打ちすると煙草に火をつける。長い付き合いで、樹がこう言い出すと絶対に考えを曲げない事がわかつているだけに、満も何も言えないのだ。

「んで、お前さん何が見えた？」

一瞬で6割ほど灰になった煙草を灰皿に押し付けると、満が唐突に聞く。

「釘、でしょうか？臍気でしたが」

樹に見えていたのはソウヤの腹や胸に突き刺さる巨大な釘の幻影だ。呪いが視覚化したものか何かだろう。

「俺もだ、おそらく丑の刻参りだろうよ…そうとう長期に渡る呪いだろうな、けっこうはつきりと見えたし」

「でしたら尚更放っておけませんよ」

―俺としては放置しておきたいんだがなあ―そんな言葉を満は飲み

込んで、いつもの言葉を言う。

「んじゃ、行くか？明日あたり」

「行きましよう」

―翌日深夜・とある神社の敷地内―

敷地内の寺社林に樹と満、そして電話で呼び出されたソウヤがいた。

「なあ、こんな時間にこんな場所で何するんだよ」

不満そうなソウヤだが、2人は無視して注連縄しめなわを周辺の木に結び付けている。ここに隠れて様子を見て、最低限呪いの無効化、必要なら呪い返しをする算段だ。

「これでよし…おい依頼人、あんたはその注連縄で作った領域から絶対出るなよ？死にたいなら話は別だがね」

機嫌の悪そうな満がそう言いながら吸殻を携帯灰皿に押し込んでいると、樹が補足説明を入れる。

「それから、声や音も出さないでください、携帯の電源も切ってくださいね」

よくわからない、といった顔でソウヤはそれに従い、二人も領域に入る。

「来たぞ、ここからは一言も話すなよ…」

そう言った後、満が何事かつぶやきだす。隣に居る樹にすら聞き取れないほどの小声で、なおかつ内容もさっぱりわからないものだ。

森の奥から何者かが歩いてくる。右手に木槌、左手には五寸釘の束、頭には火の点いた蝋燭を結びつけた女性だ。

女性は何かをつぶやきながら樹たちの近くにある大木まで歩いてく

る。

「…ラレタ、スてらレタ、あんナニアイシテイタのニ、あノヒトハホカノ…」

抑揚のおかしい言葉と共に、女性は淡々と持っていた五寸釘を既に打ち付けてあつたわら人形に打ち付けていく。

かつん… かつん… かつん…

木槌が釘を叩く音だけが深夜の森に木霊していく。

「ユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイ
イ…」

地獄から響くような声と血の涙を流しながら女性は左手に持っていた五寸釘を全て打ち込み終えた。その時だった。

「っざけんなよ!？」

ソウヤだった。恐怖と怒りに顔を歪ませながら一気にまくしたてる。
「オマエ何?何なの?オマエとは遊びだつて俺言つたじゃん!?!なの
に何でいつまでも引きずつてオマケに俺のこと呪ってくれちゃつ
てんの?アツタマおかしいんじゃないの!？」

ソウヤの声に女性が反応し、虚ろな目でソウヤを見つめる。

「ミツケタミツケタミツケタミツケタミツケタミツケタミツケタ…」
次第に女性の姿に変化が起きはじめる。長い黒髪がざわざわと動き、
犬歯が伸び始め、額に2つの隆起がではじめる。

「いかん…!」

「あれは…般若ですか!？」

2人の焦った声をよそに、女性は変化を続け、ソウヤはその場へ

たり込む。

「生成り《なまなり》だ…彼女は般若になりかけている…手遅れだったか」

「そんな…なりかけなら何とかならないんですか!？」

樹の叫びに対し、満は力なく首を横に振る。一度こうなってしまうてはもう戻れないのが鬼なのだ。

生成りとなった女性はじりじりとソウヤを追い詰める。間もなく先ほどまでわら人形が打ち付けられていた木を背に、ソウヤは動けなくなった。

「アソビダナnte…ウキナnte…があああああつ!!!!!!」
生成りは血涙を溢れさせ、天に向かって咆哮する。獣のようなその声は深い悲しみと激しい怒りが籠ったものだった。
その怒りは鋭い爪をもった手を動かし、目の前で震えているソウヤを引き裂こうと迫る。

ソウヤが死を覚悟したその時、何者かが割り込んだ。

「待つてください!」

樹がその間に無理やり割り込み、生成りの腕を掴んで止めたのだ。

しかし半ば人外である生成りの膂力は成人男性のそれを遥かに凌駕するものだ。徐々に力負けし、樹の額に脂汗がにじむ。

「貴女がまだこの人のことを少しでも愛しているのなら、待つてください!」

説得しようとする樹だが、人の心を失った生成りは聞く耳をもたない。獣のような唸り声とともにさらに力を込める。樹がかなり押され、いよいよその後ろで放心しているソウヤに達しようとした瞬間、生成りにまた邪魔が入った。

「そおい」

やる気を感じない満の声とともに飛んできたのは桃の種だった。桃の種は生成りに直撃し、怯ませる。

「なりかけと言っても鬼は鬼か…桃が効いてよかった」

桃というのは古来より聖なる実であり、鬼も嫌うものであった。もしもの時のため、と満が持ってきたものが功を奏したようで、生成りは種の落ちたあたりには近づけないようだ。

「ソウヤさん、彼女に何か言わなきゃいけないんじゃないですか？」
樹がソウヤを助け起こしながら諭すと、ソウヤはその場ではいつくばって叫ぶ。

「ほっ…本当に…すみませんでした！」
それを見ていた生成りはしばらくソウヤを凝視すると、くるりと背を向けて森の奥へと消えていった。

―後日・バー『ネペンテス』―

「これで良かったんでしょ…」

ひどく沈んだ様子の樹と、いつもどおりの様子の満の間に週刊誌がある。

男子大学生、何者かに惨殺される。頭部は未だに行方不明。

そんな記事が書かれたページが開いている。

「あいつ、結局反省してないどころかまだ何人も女に手え出してたんだな」

呆れた、といった表情の満は週刊誌を丸めて、近くのゴミ箱に放りこむ。

「あの時彼が本気で反省していれば…こんなことにはならなかったのに」

樹が悔やみ、満が呆れているのはソウヤのことだ。生成りに殺されずに済んだまでは良かったのだが、記事を見るにその後も複数の女性と同時に交際し、それが露見した結果交際していた女性に殺害された、らしい。どこまでが事実でどこからが憶測かはわからないが、そういう話だ。

「まあ i f の話しをしても仕方ないさ…確かに後味は悪いが」
それよりも、と満は続ける。

「あの生成りについてなんだが、どうやら無事鬼の棲む里に行けたようだよ」

どこからそんな話を聞いてきたのやら、そう聞きたい樹だったが、それは言わないでおくことにした。

「彼女は、幸せになれるんでしょうか？」

「大丈夫だろう、根拠は無いが俺はそう思うよ」

そう答えると、満はジンの入ったグラスを傾ける。

「そうだといいですね」

樹もそれに合わせてオレンジ色のカクテルが入ったグラスを傾ける。
生成りとなった女性の幸せと今夜の酒が明日に残らないことを祈りながら。

にかいめ　こくる？（後書き）

こんにちは、金武です。

このような駄文にお付き合いいただき、ありがとうございます。

「こくる」といっても（丑の）刻（参りをす）るでこくるです。甘酸っぱいアレとかソレは発生しません。すみません。

ただただ生成りが書きたかった、それだけで打った結果がこれです。

「浮気」について全否定するような内容となっていました。これに不快感を持たれる方がいらっしやいましたら申し訳ございません。作者の個人的思想に基づいた結果です。

今回もヤマなしオチなしの短文で誠に申し訳ありません。

これから努力していこうと思います…

さんかいめ つく？（前書き）

- ・ 今回も残念クオリティです
- ・ 何がしたいかわからないのは…私にもわかりません

さんかいめ つく？

がしゃがしゃ

―塔瀬市・バー『ネペンテス』店内―

11月に入り、ますます寒くなってきた塔瀬市内、適度に暖房のきいたネペンテスのテーブル席に樹、満、そして見慣れない女性が座っていた。

女性は突然ヨロヅヤに現れ、依頼をしてきたのだ。

「それで、白川さん、どういったご依頼ですか？」

樹が懷からメモ帳を取り出して尋ねる。ずばらな満が忘れた時のためのメモ、という側面が強いが、仕事の内容を記録するためのメモだ。

「ユリ、でかまいません…実は先日父の遺品を整理していたときに父が生前大切にしていた瀬戸物の壺が出てきました」

ユリの話はこうだ。

整理した遺品の中にあつた瀬戸物の壺が何度倉庫の奥にしまいこんでも倉庫の入り口に出てきている。倉庫の鍵を厳重に管理したが、まったく効果がなかったそうだ。

「それで、何かの靈障ではないか、と考えたんですね」

「とりあえず、調べてみないと何もわかったもんじゃあないですし、

明日あたりお邪魔しますよ、ただかなり遅い時間になりますがね」樹の確認に次いで満が話を進める。遅い時間になるのは『何か』がいた場合、一番活動している時間だからなのだが、わからないのかユリは怪訝そうな顔をしている。

「霊障なんかであれば、深夜の方がわかりやすいんです」

怪しまれては困ると考えたのか、樹が補足説明を入れると、納得したようにユリが頷く。

その後、翌日伺う正確な時間や報酬等の事務的な話をする、ユリは帰って行った。依頼者を事務所ではなく半ば無理やりネペンテスに連れてきたのだから、それくらいはさせてほしい、という樹の言い分によって会計は樹達が持つこととなった。

「所長、あの人有名なメイクアップアーティストですよ？」

売れっ子メイクアップアーティストという、思わぬ有名人の依頼に驚いた様子の樹に対し、満は至ってドライな反応を返す。

「どんな有名人だろうが面白くない依頼なら蹴るつもりだったんだがなあ、まあ…話を聞くに面白いものが見れそうだ」

『面白いもの』が何か予測がついているのか、煙草をくわえた満の口角が少し上がる。

当然樹も何が出るか気になるが、聞いたところで満が答えるはずがないのはわかりきっているので、何も言わずにグラスの酒を飲む。

「2人とも、『もったいないおばけ』って知ってる？」

突然、グラスを拭いていたマスターが2人に尋ねる。

「昔放送していたCMですか？」

心当たりがあるのか、樹が答える。

「そうそう、ああいうCMをもっと流すべきやねんけどなあ…今の子はものを大事にする習慣が薄くなってるし」

樹の反応がうれしかったのか、マスターは笑顔で語る。

余談だが、マスターは20年近く前に関西から塔瀬に来て、ネペンテスでバーテンダーとしての修行をしていたらしい。その後店を継いで、今に至る。

「マスター…俺、わからないんですが…」

テレビを全く見ない満が置いていかれていることに不満そうな声を漏らすと、樹が説明する。

「昔あったCMで、食べ物を粗末にした子どもの枕元に現れて脅かすって内容のアニメなんですよ」

「ああ、そりゃいい内容だ…食べ物でも何でも、粗末にすれば祟られるからな」

3人はそんな話をしながら酒を飲み、早朝になるまで語り明かした。

―翌日深夜・住宅街―

「依頼者の家の場所聞いてる？」

樹の予想どおり、話をほとんど聞いていなかった満が尋ねると、待っていましたと言わんばかりに地図が樹の懷から出てくる。

手書きながら、丁寧な地図と照らし合わせると、どうやら近くのようだ。

と、言うか考えるまでもなかった。

「すごく…大きいですね」

樹の視線の先には大きな土塀に囲まれた平屋建ての日本家屋があっ

た。

「あー、こりや大きい…あと、気配もちょっと大きいな」

満も家の大きさに圧倒されつつ、警戒と水筒の酒をあおるのを忘れない。

呼び鈴を鳴らし要件を伝えたと、ユリが出てきた。深夜というものあり、少々眠そうだ。

「こんばんは、早速ですが…俺は調査に行きますのでね…」

一礼すると、満は何かに誘われるようにふらふらと歩いていく。

「すみません、所長はああいいう人なんです…」

樹が申し訳なさそうに謝罪すると、ユリはとんでもない、というように首を振りながら満の後を追う。

「問題の倉庫はこっちなんですが…所長さんは場所がわかるんですか？」

やはり疑問に思っていたらしく、ユリが尋ねる。事前に調べていたわけでも聞いたわけでもないのに、迷わず倉庫に向かって歩き出したのだ、気味が悪いだろう。

「妖怪だとか、そういうものがいたら僕らは気配がわかるんです、所長はそれを辿って行ったんでしょう。」

そんな説明をしつつ敷地内を歩くと、暗闇にそびえる倉庫と、その前に座って酒を飲む満が見えた。

「あと10分、依頼者さんは靈感ある？」

よくわからない前置きとともに、満が質問すると、ユリは首を横に振る。

「ならこれ目蓋につけて、あとは待つだけ」

満が差し出したのは小瓶だった。中身は聖水か何かだろう。目蓋につけて一時的に『そういうもの』を見やすくしようという魂胆だ。

10分後、倉庫前で座って待っていると、異変が起きた。

倉庫の扉をすり抜けて、何かが出てくる。全身陶器でできた武将の

ような何か、頭が琵琶になった何か、顔の浮かび上がった鏡のような何か、顔のある水瓶のような何か、その他諸々が列をなす。

「ほう、予想以上にレアもの揃いだな…」

満は満足そうに目を細めているが、ユリはそれどころではない、顔面蒼白になり、今にも気絶しそうだ。

「所長、何なんです？こいつらは」

そろそろと歩く『何か』たちを指差し、樹が聞く。

「先頭は瀬戸大将、頭が琵琶なのは琵琶牧々、鏡は雲外鏡、水瓶はたぶん瓶長…いすぎて全部はわからんが、みんな付喪神…いわゆる魂のある道具だ、本来それほど害はない…あと依頼者さんは落ち着いて」

早口に説明し、水の入ったペットボトルを差し出す。

付喪神たちは敷地内をぐるりとまわり、倉庫まで戻ってくると、今度はそれぞれ散らばって見張りでもするように周囲を警戒しだす。

「あれは何をしているんでしょうか…」

落ち着いたのか、ユリが付喪神の様子を観察していると、がしゃがしゃと音をさせながら瀬戸大将が近寄ってくる。

ユリの前まで来た瀬戸大将は軽く頭を下げるような動作をすると、またどこかに歩いていく。

「今の、父が生前大切にしていた壺です…いつも倉庫の入り口に出てきていた」

瀬戸大将の頭部の壺に見覚えがあるらしく、ユリが追おうとすると満がそれを止める。

「待った、たぶん依頼者さんとは会話できないと思うから、俺が話してくる」

そう言っ、満が瀬戸大将のところに走り寄り、何事か話しだす。双方が頷いたり、何か身振り手振りを交えて話している様子を樹たちが見ていると、満が戻ってくる。

いたく感心した、という顔の満の話を要約するところなる。

瀬戸大将の本体である壺はユリの父に相当大切にされていたらしく、その恩を返そうとしたのだが、その前に亡くなってしまう、ならばとその娘であるユリへ恩返しをしようと思いついたそう。

そして、夜間になると家の敷地内を警邏し、家とユリを守ろうとしていたというのだ。

「そんなことが、あるんですね……」

驚いた様子のユリがつぶやくと、満が続ける。

「迷惑であればやめる、と言っていたが…どうする？」

妖怪である彼らは自分達がうろつろしていることで主人に迷惑がかかっていないか考えながら動いていたのだ。

「いえ、彼らの気持ちはとてもうれしいですし、理由さえわかればそう怖くありませんから」

父の遺品を筆頭とした倉庫の物たちが父を思い、自分を守ろうとしていることを知ったせい、ユリは心なしか感動した様子だ。

満がそれを瀬戸大将たちに伝え、彼らはうれしそうに小躍りしながら倉庫に消えていった。

結局、その日はそれで樹たちは帰ることとなった。

—さらに翌日・バー『ネペンテス』店内—

いつものようにカウンターに樹と満が座り、グラスを傾けながら話している。

「丁度、もったいないおばけみたいな感じなんですかね」

「まあ、お前さんやマスターの話から察するにそうだろうよ」

2人は一昨日の話と今回の付喪神の話をしている。もっとも、粗末に扱ったからではなく、持ち主が心底大切にしていたからこそ魂が宿ったからこそ今回の付喪神なのだ。

「どんなもんでも大切に使用してたらそれに応えてくれるもんなやな」

毎度仕事の顛末を聞かされているマスターがしみじみとつぶやく。そんなマスターの腕にはまる腕時計は父親の遺品なのだそうだ。

「マスターの時計もそうかもしれないね」

決して高価な時計ではないが、使い込まれた時計を見て、樹が冗談めかして言うと、樹がそれに重なる。

「うん、あと数年もすれば立派な付喪神になると思いますよ」

それを聞いてマスターはなんとも言えない表情になる。大切なもので愛着はあれど妖怪となるのは嫌なのか、それともより愛着がわいたのかは本人にしかわからない。

「それはともかく、ユリさんがあの妖怪達と仲良くできるといいですね」

「まあ、大丈夫だろう、瀬戸大将が良い奴だったし」

「そういう問題ですか？」

「そついうもんだ」

さんかいめ つく？（後書き）

おひさしぶりです、あるいははじめまして、金武です。

いつも極限まで低いクオリティかつ短文で大変申し訳ありません…

毎度毎度、回を追うごとに樹が空気になってる気がします…彼には都市伝説が相手の時に活躍してもらいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7239u/>

アヤカシとかアレとかソレ

2011年10月9日09時22分発行